南多摩保健所における新型コロナ対策業務を支援した災害医療ワーキンググループおよび大学の取り組み

平田尚人 [1、5)]、 鈴木健介 [2、5)]、張替健 [3、5)]、北野信之介 [4、5)]、郡 愛 [2、5)]、久野将宗 [4、5)]
1 東京薬科大学薬学部、2 日本体育大学大学院保健医療学研究科、3 社会福祉法人三祉会公益事業部、
4 日本医科大学附属多摩永山病院救命救急センター、5 南多摩医療圏災害医療ワーキンググループ

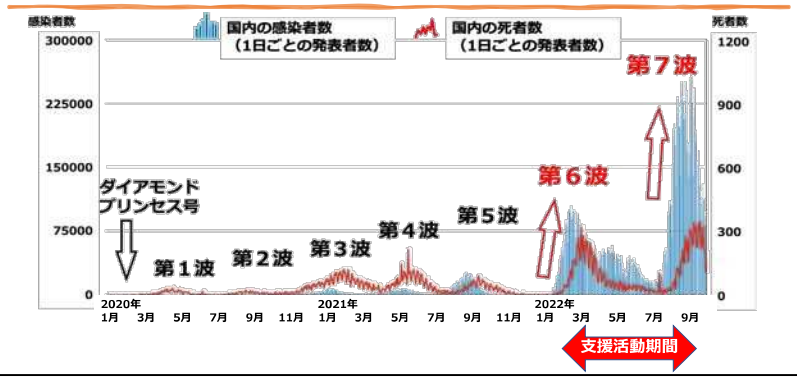
南多摩医療圏で、保健所における新型コロナ対策業務の支援活動を大学と連携して組織的に展開しましたので、紙上にて発表させていただきます。

背景と目的

- 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）では，ο（オミクロン）株による感染者数が2022年1月中旬ごろから急激に増加し，保健所業務は一気に逼迫した．
- そこで，南多摩保健医療圏災害医療ワーキンググループ（以下，WG）は，南多摩保健所におけるCOVID-19対策業務の支援チームを構築した．
- 支援チームには，南多摩医療圏の医療機関や大学に所属する医療従事者および教員からなるWGに加え，教員が所属する日本体育大学および東京薬科大学の学部生・大学院生をメンバーに加えた．
- また，2022年9月までの支援活動について，活動に参加した支援者の意識変化を把握する目的で，アンケート調査を実施した．
- 本発表では，WGと大学が連携した保健所業務の支援活動とその活動内容，支援者側の意識変化について報告する．

この支援活動は、災害医療ワーキンググループ（WG）の活動の一環でありますが、同圏内の大学との連携を行ったことが特徴的です。

新型コロナウイルス感染者数・死者数推移と支援活動期間



新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染者数の推移と本支援活動の活動期間について示しました。

南多摩医療圏災害医療ワーキンググループ（WG）の概要

WGの構成と活動内容

- 東京都南多摩医療圏（八王子市，多摩市，町田市，日野市，稲城市）における救急・災害医療体制の充実や研修体制の整備を目的として，同圏内の医療従事者および行政・保健所・消防関係者等のメンバーで構成.
- 月1回の定期ミーティング（コロナ以降はオンライン），救急・災害医療関連の訓練および研修会へ協力や企画運営，医療圏内救急搬送システムの開発，災害ボランティア活動の支援などを展開，平時から密接な情報交換と活動を通して，顔の見える関係づくりに力を入れている.

ワーキンググループ（WG）のメンバー構成と活動内容について示します。

支援活動開始までの時系列

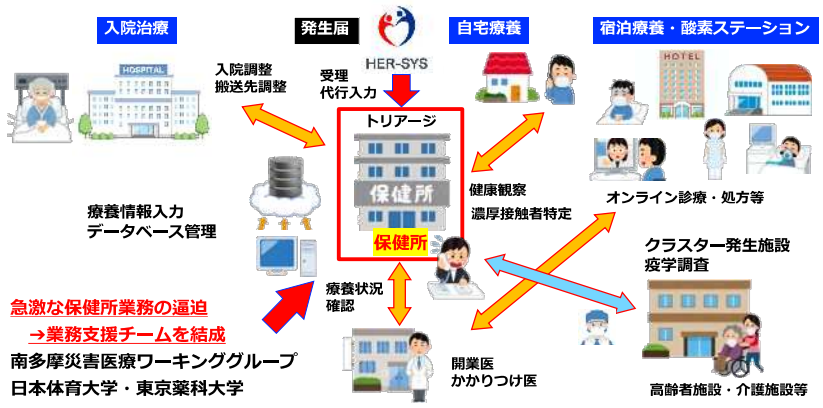
2022年 1月中旬

オミクロン株による感染者数が急速に増加し保健所業務が短期間で逼迫.

	活動内容	目的
1月21日	近接する日本医大多摩永山病院のWGメンバー（久野医師ら）が，東京都南多摩保健所の新型コロナ対策業務について現状を視察	業務内容の概要と現状の把握
1月25日	WGにて保健所業務の支援方法を協議	支援の必要性検討
1月27日	WGコアメンバーによる支援を開始	現場でのニーズ把握
2月3日	WGメンバーと保健所の各部署担当責任者とのミーティング	当面の優先的ニーズと支援方法の再検討

本活動は第6波の感染者数が急増し始めた2022年1月下旬より展開し、南多摩保健所の現状把握とニーズの検討から開始しました。

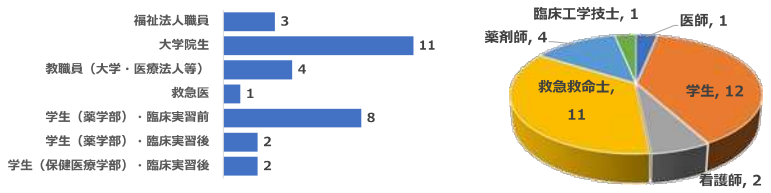
COVID-19療養患者への対応と保健所の役割



COVID-19は支援活動の開始時点で感染症法上の2類相当のため、その対応に当たる保健所の業務は多忙を極めます。

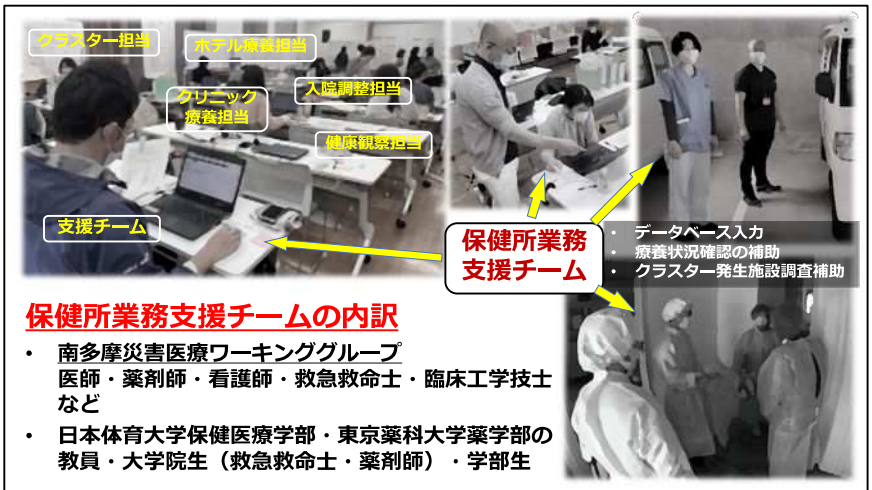
支援チームの所属と職種

支援メンバー（31名）の内訳



支援業務のうち，感染リスクが伴うクラスター発生施設への疫学調査は，教職員または大学院生（医療従事者免許の有資格者）のみとした．データ入力作業については学生を中心に稼働させ，教員および大学院生は作業の進行管理（リーダー役）や支援人数の調整を行った．なお，今回の活動は無償ボランティアとはせず，東京都非常勤職員として身分を明確化した．

支援チームには31名の医療関係者と学生が参加しました。その内訳について示します。



保健所業務支援チームの内訳

- 南多摩災害医療ワーキンググループ
  医師・薬剤師・看護師・救急救命士・臨床工学技士など
- 日本体育大学保健医療学部・東京薬科大学薬学部の教員・大学院生（救急救命士・薬剤師）・学部生

支援活動のイメージです。

CSCAについて

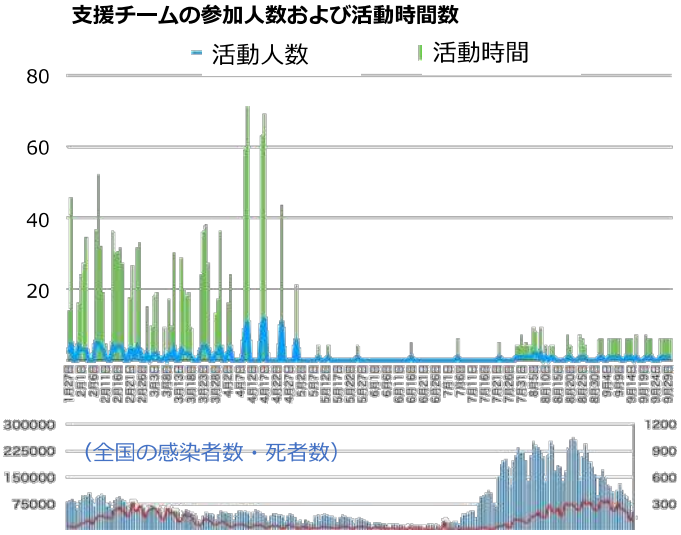
C 統制と役割分担	活動全体の総括（久野医師），保健所との連絡・意思疎通（張替），支援業務の進行管理と調整（鈴木・平田）
S 安全管理	支援者の基本的な感染対策の実施，学生・大学院生の体調管理等は大学教員が中心にfollow
C 情報共有と連絡手段	Googleフォームでのシフト管理，LINEおよびメールでの業務報告と申し送り（情報共有）
A 業務内容の検証	週1回の合同ミーティング（保健所+WG）にて，活動報告と問題点の抽出，今後の方針について定期的に検討

本活動の組織と体制を災害医療の基本原則であるCSCAに当てはめるとこのようになります。

支援業務の活動人数および活動時間の推移（集計期間：2022年 1/27～9/30）

支援活動は主に第6波のピークである2月から3月にかけて集中的に実施された.
4月以降は週末に多数の学生を動員して集中的な入力作業を実施し，施設調査については必要時に要員を手あげ方式で募集した.

- 登録参加者　31名
- 延べ活動人数　225 名
- 総活動時間数　1,592 時間
- クラスター発生施設疫学調査への同行　11回



支援活動は、保健所業務の逼迫状況をみながら、9月末まで活動を継続しました。この間の業務内容や業務内容の調整、シフト管理は教員またはリーダー役の大学院生が担いました。

主な支援業務の内容と業務量について

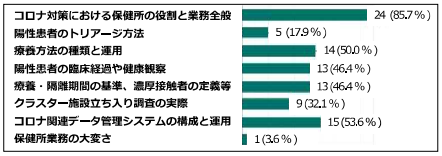
業務内容	従事割合（重複あり）
・ 療養経過等の情報入力・データベースの情報整理	78.6%
・ 発生届関連（HER-SYS代行入力の補助等）	64.3%
・ クラスター発生施設の立ち入り調査・議事録および報告書作成	25%
・ 手書きファイル・リスト等への記入と整理	21.4%
・ 所内管理のExcelファイル等のデータ管理ツールの作成・整備	14.3%
・ 電話連絡の補助（発症日確認・体調確認・医療機関への確認等）	14.3%
・ 活動方針への助言や情報提供等	14.3%
・ その他支援活動の継続に必要な業務 ・ 支援メンバーのシフト調整・勤怠管理等 ・ 支援者の業務マニュアル（手順書）の作成	7.1% 3.6%

従事した人数から算出した主な支援業務内容の内訳です。

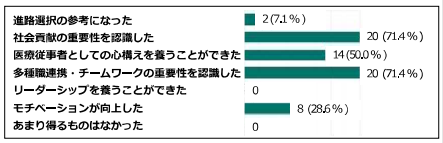
支援者側へのアンケート調査（教育的効果）

- 今回はWGと大学と連携した支援活動で，多くの学部生や大学院生が活動に参加した．
- 支援者に対する教育的効果を検証する目的でアンケート調査を実施した．
  有効回答数（28名/31名中，90.3%）
- 医療系の学生であるため，支援活動により自身の医療従事者としてのキャリアデザインの構築、社会貢献や多職種連携の重要性を認識することに役立ったとの意見が多く聞かれた．

支援活動を通して理解が深まった事項は何ですか。（複数回答可）



支援活動を通して得られたものは何ですか。（複数回答可）



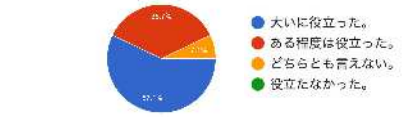
支援活動の教育的な効果を見るためにアンケート調査を実施しました。

支援者側の教育的効果

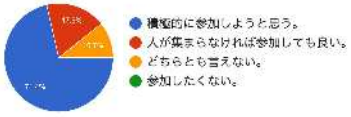
ご自身の支援活動の貢献度はどの程度だと思いますか。

- 今回の支援活動に参加した医療系学生にとっては，自身のキャリアデザイン構築や実際の現場で学ぶことが大変貴重な経験となったことが伺える．

支援活動は医療従事者としてのキャリアを考えるうえで役に立ちましたか。



今後、再び保健所業務の支援活動が必要になったとき、参加しようと思いますか。



特に医療系学生にとっては、自身のキャリアデザインを考える上で貴重な経験となり、支援者にとっても有益な活動であったことも示されました。

まとめと考察

- 今回，新型コロナ対策の保健所業務支援活動において，平時から南多摩医療圏で活動を展開しているWGと大学が連携して速やかな支援体制が構築できた．
- 活動開始後も保健所の逼迫状況に応じた柔軟な活動が展開できたと考える．
- 今回の経験を踏まえ，新たな感染者急増や他のパンデミックに対して，保健所等の対応拠点に人的資源を臨機応変に派遣できる仕組みづくりが重要であると痛感した．
- 特に医療系学生の場合は，支援活動が自身の医療従事者としてのキャリアデザインの構築，社会貢献や多職種連携の重要性を認識するきっかけにもなり，教育的にも優れた効果のある活動であると考えられる．

今回のように、速やかな支援体制の構築や、ニーズに応じた柔軟な対応には日頃からの関係づくりが極めて重要であることが改めて証明されました。

発表は以上です。ありがとうございました。